明日を語ろう!

北の農業人

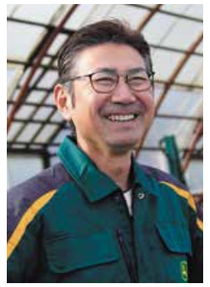
KITANO NOUGYOUBITO

北海道農業に限りない愛情を注ぎ、
たゆまぬ努力を続ける人々がいます。
農業の未来を創造する「北の農業人」の
情熱や取り組みをご紹介します。

●農業を継続していくための戦略的な取り組み

先進的なテクノロジーを導入し、農作業の省力化と効率化を実現。地域のスマート農業を牽引し続ける。

［清水町］
佐藤農園
佐藤博志さん



●佐藤さんは30歳のときに父の忠昭さんから農業を継承しました。地域の農業の底上げに貢献したいという思いから、清水町農民連盟の書記長を務め、陳情活動や税金申告のサポートなどをしています。

●佐藤さんが導入した頃は珍しかった自動操舵システムも、現在では町内の多くの農家が活用しています。

●自動操舵システムは汎用性の高さも魅力と話す佐藤さん。「トラクターに続いて、ブロードキャスターにも自動操舵システムを利用したセクションコントロールを導入しました。施肥作業が無駄なくできるので、時間や経費の節減にもつながっています」

●独自に設置したRTKの固定基地局。基地局から位置情報を送ることで誤差が数センチになり、精度の高い作業が可能になりました。

農作業を劇的に変えた自動操舵システムの導入

近年はスマート農業が提唱され、ITを活用した技術の開発が盛んに進められています。清水町で3代続く畑作農家の佐藤博志さんは、地域でいち早くトラクターの自動操舵システムを導入し、農作業にかかる負担を大幅に減らすとともに、収益性の向上も図ってきました。

佐藤さんが自動操舵システムに関心を持ったのは今から10年ほど前。当時は導入している農家が少なく、情報も限られていました。「先行して取り組んでいた人にSNSを通じて連絡を取り、情報を教えてもらいました。今のような助成制度がなかったため、導入費用はすべて自己負担でしたが、ほぼ誤差がなく作業できると知り、驚きました。また、汎用性が高く、年式の古いトラクターでも最新機能を備えられることもメリットでした」

2012年に自動操舵システムを導入した佐藤さんですが「1年目は畝が真っすぐにならず、失敗の連続だった」と振り返ります。メーカーもノウハウがなく、自分で試行錯誤するしかありませんでした。そこで、位置情報のずれを補正するRTK（リアルタイムキネマティック）の基地局を設置したところ、劇的に精度が改善。計算通りの畝幅になり、農地を最大限に使えることで収量の向上にもつながりました。また、農作業の時間が短縮でき、操縦にも神経を使わなくて済むことで、疲労感が大きく軽減されました。

現在、佐藤さんは40ヘクタールの農地で畑作4品を栽培。主力のトラクター5台に自動操舵システムを搭載しています。圃場の作業は父親の忠昭さんとほぼ2人で切り盛りしていますが、これだけの規模を維持できるのは先進技術を積極的に活用していることが大きいといいます。

付加価値を高める特別栽培への取り組み

佐藤さんは24年前から大豆の特別栽培に取り組んでいます。きっかけは地元農協からの誘いでした。「当時は小豆や金時豆を作っていたのですが、防除などに手間がかかり苦労が絶えませんでした。同じ手間がかかっても、減農薬・減化学肥料栽培という付加価値の高い大豆なら高く売れることに魅力を感じました」

その後、1999年に「十勝クリーン大豆生産組合」を立ち上げ、2000年度には「北のクリーン農産物表示制度」に認定登録されました。佐藤さんは2010年から同組合の組合長を務め、地元の堆肥を使った地域循環型の大豆生産を推進。最初は5戸からスタートした生産者が今では倍以上になるなど、特別栽培の取り組みは着実に地域に根付いています。

同組合で生産した大豆の多くは、東京にある大豆製品の製造卸会社が買い取り、納豆に加工されます。そうした取引のある企業が畑を視察したり、組合員が加工工場を見学したりという交流も長く続いています。佐藤さんは、取引先や消費者と顔の見える関係を築くことを大切にしたい、と話します。「出荷したら終わり、ではなく、取引先や消費者の信頼に応えるものを作るのが生産者の責任だと考えています。高く売れれば、という思いで始めた特別栽培ですが、今では取引先との強い結び付きや、食べた人の『おいしい』という声がやりがいになっています」

先進技術を活用しながら思いは原点の土づくりへ

佐藤さんが次に注目しているのが農薬散布用のドローンです。数年前から情報を収集していたそうで、助成制度などが整ったため今年の春に講習を受け、操縦ライセンスを取得しました。仲間の農家の関心も高く、一緒に受講しないかと周囲に声をかけたところ「14人も希望者がいてびっくりした」と笑います。佐藤さんはすでにドローンを購入していて、雨で圃場に機械が入れないときの防除や緊急防除を中心に活用していく予定です。

「最近は、町外の生産者からも情報を教えてほしいという連絡を受けるようになりました。新しいことに興味はあっても、実際に挑戦するのはなかなか難しいもの。自分が率先して前例をつくることで、他の人たちもやってみようと思うきっかけになれば、と考えています」

佐藤さんは近年、土づくりの大切さを再認識し、勉強会や情報交換会などに積極的に参加するようになりました。「30年近く農業を続けてきて思ったのが、新しい技術を取り入れても、足下の土のことを知らなければ、いいものは作れないということ。農家にとって基本ともいえる土づくりですが、知れば知るほど奥が深く、興味が湧いてきます」と目を輝かせます。今後は、より詳細な土壌分析を受け、農地の改良を進めていきたいそうです。

最新のテクノロジーを活用しながら、原点である土づくりに立ち返り、より良い農業を実現しようとする佐藤さん。飽くなきチャレンジ精神と探究心で、これからも地域の農業を牽引していきます。

●大豆に続き、2009年からは小豆の特別栽培も手がけています。北海道産の小豆の人気は高く、主に関西方面に出荷されています。

●佐藤さんは男爵、とうや、ホッカイコガネなど5種類の種ばれいしょを生産しています。清水町は農家が選果を行うのが特徴で、手間はかかりますが、他の産地より出荷時期を早めることで市場を占有できるメリットがあるそうです。